

Yuichi Kajiyama :

## An Introduction to Buddhist Philosophy

(An Annotated Translation of the  
Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta)

長崎 法潤

近代において佛教学は飛躍的な進歩を遂げたが、そのうち因明、すなわち佛敎論理学研究の分野においては極めて最近にいたるまでそれ程の成果は見られなかった。それは佛敎論理学を代表する陳那の名著 *Pramāṇasamuccaya* のサンスクリット原典が散逸し、漢訳も存せず、チベット訳のみが現存している關係上、比較研究によって陳那の論理学体系を説明することが困難であったからである。陳那以後佛敎論理学を發展させ、大成した法称の名著 *Pramāṇavārttika* に関しても、長い間ほぼ同じ条件のもとにおかれ、法称の全体系を明らかにされ得なかった。更に法称以後佛敎論理学に関して一般に衰微の道を辿ったと言われているが、それにしてもどのような展開をなしたのか、その真相を知ることが資料の不足によりできなかった。

ところが *Rahula Saṅkīryāyana* などの尽力により法称の *Pramāṇavārttika* 及び彼以後論理学の展開に貢献した *Jñāna-*

*śrīmītra*, *Ratnakīrti* の論理学に関するかなり多くのサンスクリット原典が回収され、近年にいたって初めて佛敎論理学体系を直接にその原典から知ることが可能になった。しかしながら陳那の *Pramāṇasamuccaya* は依然としてそのサンスクリット原典が存しないが、そのチベット訳から、服部正明博士は認識論に関する問題が取扱われている部分 (*Harvard Oriental Series* から近く刊行される)、北川秀則博士は論理学に関する問題が論じられている部分(「インド古典論理学」鈴木学術財団一九六五)をそれぞれ現代語訳するのに成功している。これにより陳那論理学の全貌がほぼ明らかになった。

京都大学助教授梶山雄一氏は法称以後の論理学、すなわち後期佛敎論理学の展開に多年注意を払い、*Jñānaśrīmītra* や *Ratnakīrti* 等の論理学について数多くの優れた研究を発表してきたが、この度「京大文学部研究紀要 第十一」(昭和四十一年)に最後期に属する佛敎論理学者 *Mokṣākaragupta* 著 *Tarkabhāṣā* の全英訳を發表している。*Mokṣākaragupta* の論理学の全体系がここに初めて明らかになった。

*Tarkabhāṣā* は全体を現量、為自比量、為他比量の三章に分け、佛敎論理学を解説した小著であるが、*Nyāyabindu* や *Dharmottara* の *Tīka* 及び *Vidyākaraśānti* の *Tarkasopāna* より内容ははるかに豊かである。それは、*Dharmottara* や *Vidyākaraśānti* より多くの論理学書に基づいてこの書が書かれているからであり、特に後期論理学を代表する *Jñānaśrīmītra* 及び *Ratnakīrti* の説に負う箇所が多く、後期論理学説を知るた

めの良書である。

前述の如くこの書は三章に分かれ、法称の論理学説、及びそれ以後発展せる説について論じているが、その内容における特筆すべき点について英訳の「序文」(二一六頁)において要領良く記されているので、以下それによりながら紹介したい。

〔第一章〕 佛教論理学の伝統通り現量 (pratyakṣa) と比量 (anumāna) とを認め、他の学派によって認められていた声量 (śabda)・譬喩量 (upamāna)・義準量 (arthapatti)・無体量 (abhāva) 及び現量のみを認める Carvaka の説を論駁する。

この場合主に Ratnakīrti の Pramāṇāntarbhāvaprakaraṇa に従いながら論証をなしている (§ 4)。語々それによりて意味やれるものこの結合関係 (sambandha) を論駁する箇所は法称の Sambandhaparīkṣā における論じられべき説を採るのみ採る用じられる (§ 4.2)。量の妥当性 (pramānya) は自立的であるか他立的であるかという問題を論ずる場合、Santirakṣita と Manorathanandin の説に従い、量のある種のもの妥当性は自立的に知られ、他のものは他立的であると論じられる (§ 2.4)。自証 (svasāhvedana) の説に關し、法称、Prajākaragupta, Santirakṣita の説を引用し、Kumārīlabhāta, Tilocana の論駁を批判しながら詳細に論じている (§ 6.2)。

佛教論理学の伝統では現量の対象は自相 (svalakṣaṇa) である。その二つの共相 (sāmānyalakṣaṇa) の間に成立する遍充関係 (vyāpti) は現量によりて認識せられたところの難点がある。その二つの書は Jñānaśrīmitra と Ratnakīrti とに

従い、共相も現量の対象になりうると説く。つまり、現量の対象は自相であるということは、anyayogavyavaccheda なる関係によって言われるのではなく、ayogavyavaccheda の関係によって解釈される。すなわち自相は現量によってのみ把握されるが、現量の対象は自相のみではなく、共相も対象である。

その共相には ūrhhvatālākṣaṇa- と tiryaglakṣaṇasāmānya との二種がある。前者は多くの刹那の集合としての共相にして、「これ」という個物において同種のものである。後者は異種類のものから區別された多くの同種のものである。共相の二種の分類は Jñānaśrīmitra に Ratnakīrti にも見出され、Parīkṣāṃkhastra の著者シャイナ僧 Mānikyaṇandin の在世が九世紀であるならば、彼が初にこれにつき論じたのではなからうかと指摘している。

否定命題の解釈にも paryudāsa- と prasajya-pratiseḍha との二種の理論がある。「x is not y」という否定命題は、前者の解釈によれば、x is a non-y or z となり、後者によれば、It is false that x is y となる。佛教論理学によれば、anupalabdhī (不認得) とは否定せられようとしてゐる認識とは異った対象をもつ肯定的認識にすぎない。これが paryudāsa-pratiseḍha を不認得の解釈に應用した例である (§ 13)。陳那、法称によつて説かれたマホーンの理論は、Mokṣakaragupta の時代には種々の解釈がなされ、彼は niyūtyāpohavāda, vidhivāda, apohaviśiṣṭavidhivāda の三種を記している。第一の niyūtyāpohavāda (Dignāga, Dharmakīrti の理論) は、マ

ポーンを *prasajya-pratisedha* として解釈したものであり、第二の *vidhihvāda* (*Sāntirakṣita* の理論) は、ポーンを *paryu-dasapratiseḍha* と考えたものであり、第三の *apohaviśiṣṭavidhihvāda* (*Jñānasūtrita* の理論) は上記の二説を綜合したものである (§ 26)。

【第三章】この章では主に *Nyāyabindu* 及び *Nyāyabindutīka* に従いながら論じられている。そこではまず注意を引くことは、不認得を十六種に分類していることである。法称は *Pramāṇavārttika* において四つの基本形式とそれらより導出される四つの第二次的形式とに分類し、*Hetubindu* では三種、*Nyāyabindu* では十一種に分類している。この点につき *Appendix 1* (pp. 151~154) において図式しながら詳細に整理されて論じられている。*Durvekamiśra* は不認得を十四種に分類し、ある人は十六種に分類していることを知っていた。彼は *Jñānasūtrita* と同時代に属するから、十六種の分類は *Mokṣākaragupta* 以前にあったことは確かである。*Vidyākaraśānti* も十六種に分類しているが、*Mokṣākaragupta* によったことは明らかである。誰が最初に十六種に分類したか明らかではないが、恐らく *Jñānasūtrita* を中心にする論理学者のグループであろうと論じている。この十六種の分類は、論理学の発展においてそれほどの意味を持つものではないが、合理的に整理されたという点に意義がある (§ 13.5)。

因果関係 (*kāryakāraṇabhāva*) をめぐって *Jñānasūtrita* と *Dharmottara* との二説が紹介されている (§ 11.3)。

【第三章】この章において次の如き問題が論じられている。刹那滅 (*ksaṇabhāṅga*) の立証 (§ 16.1)。自在神 (*īśvara*) の存在の論破 (§ 20.1—2; 28—28.1)。他相続 (*saṃtānantara*) の問題 (§ 20.2.4)。能立法と所立法との必然的關係はどのように把握されるか。 *Ratnakaraśānti* によって主張された内遍充論 (*antarvyāpti*) とそれに対して *Jñānasūtrita*, *Ratnakīrti* によって主張された外遍充論 (*bahirvyāpti*) (§ 22)。 *prasāṅga*, *prasāṅgaviparyaya*, *viparyayābhākakapramāṇa*, 論証式 (§ 24)。ポーネ (§ 26) の再認 (*pratyabhijñā*) の論破 (§ 28.2) 一種の一切智者 (*sarvajña*, *sarvasarvajña*) の立証 (§ 29~29.1)。有の展転 (*bhavaparamparā*) の立証 (§ 29.2)。

この章の最後に毘婆沙師、經量部、瑜伽行派、中観派の説が簡潔にまとめられている (§ 30~33)。佛教の他の論書にはこのような種類の記述が多くないこと及び *Gunaratna* が *Tarkarāhasyadīpikā* において佛教の梗概を書いたとき——恐らく *Madhava* の *Sarvadarśanasamgraha* の場合もさうであろう——それがモデルになった、と訳者は記している。またこの四学派の記述は *Jñānasārasamuccaya* 及び *Boḍhihadra* の註釈書における同種の梗概に深く関係していることも訳者によって指摘されている。

*Tarkabhāṣā* の作者 *Mokṣākaragupta* の活躍年代について英訳の「序文」(六一—一頁)において次の如く詳細に論じられている。

Tarkabhāṣā の奥付には彼はこの書を Mahājagaddhala-vihāra に於て書いたと記している。この僧院は Pala 王朝の第十四代の王 Rāmapāla によつて建立されたと伝えられているが、建立年代についての信頼しうる資料がないため、この点から Mokṣākaragupta の年代を決めることはできない。それ故訳者は次のような方法によつて証明を試みている。

Tarkabhāṣā において多くの学僧が言及され、また Mokṣākaragupta は他の学僧によつて引用されているが、その点からつづ Ratnakarāsānti, Jñānaśrimitra, Ratnakīrti と Malli-sena との間は Mokṣākaragupta が位置することが明らかである。Mallī-sena が一二九二年に書いた Syadvadamahjari にその引用が見出される。他方 Mokṣākaragupta が言及するところの三人の学僧は、一〇四〇年に Vikramaśīla 僧院を去り一〇四二年に入蔵した Atiśa と関係深い。

Jñānaśrimitra は Ratnakarāsānti の書から引用している。同学僧は Atiśa の師のなかに数えられているから、Jñānaśrimitra は Ratnakarāsānti より年少である。Ratnakīrti は Jñānaśrimitra の書の要約として Udayana の Amnatattva-vivēka に於て彼は師とともに論駁されているから、Ratnakīrti は Jñānaśrimitra の直接の弟子である。

Vācaspatimīśra の書、特に Nyāyavārttikatātparyatikā からの引用が Jñānaśrimitra の書に於て見出される。Vācaspatimīśra は Jayantabhāṣya 以後の人であることが学僧によつて証明されている。寧ろ Jayanta の Nyāyamanjari

は八九〇年頃書かれたことも証明されている。Vācaspatimīśra の Nyāyasūcīnibandha の写本に記されている八九八年に基づいて、それを Vikrama 曆によると解し、従来 Vācaspatimīśra の年代を八四一年頃とされてきた。しかし八九八年は Saka 曆による年代であると解することによつて、Vācaspati の年代は九七六年であると學者によつて訂正された。この Vācaspatimīśra の年代は Jñānaśrimitra は Atiśa (九八一—一〇五五) の先輩であるというチャムネットの資料により、Jñānaśrimitra の活躍年代を約九八〇—一〇三〇、Ratnakīrti のそれを約一〇〇〇—一〇五〇となしている。

ところが Jñānaśrimitra のこの活躍年代に矛盾するのではなからうかと思われる記録が存する。Udayana の Lakṣaṇāvahī の一写本に九〇六 Saka (西曆九八四年) と記されている。Udayana の著書のうち古く層に属する Amnatattva-vivēka において Jñānaśrimitra の書の殆んど及ぶ Ratnakīrti の書のいくらかが批判の対象になっている。Amnatattva-vivēka は Lakṣaṇāvahī の前に書かれたか否かは確かではないとしても、Amnatattva-vivēka は九八四年より前かその直後に書かれたことになり、Jñānaśrimitra は九七六年あるいは九八〇年から九八四年という短期間に Amnatattva-vivēka において批判の対象になっている彼の書を著わしたことになる。しかしながらこのようなことは考えられない。Lakṣaṇāvahī に記すところの九八四年には疑問があるとし、Vācaspatimīśra との関係などを考証のうえ、この想定は認められないとなしている。

以上の如く Jñānāśrīmitra と Ratnakīrti との活躍年代をそれぞれ九八〇—一〇三〇、一〇〇〇—一〇五〇に定めるならば、Mokṣākaragupta は一〇五〇年から一二九二年の間に活躍したことになる。その時 Kashmir の Śākyaśrībhadrā が、Vīramāśīla 僧院が壊滅されたのを、Oḍiṣā の Jagaddala に逃げ、一二〇四年に入藏したと言われる。Oḍiṣā の Jagaddala が Bengal の Jagaddhala 僧院と同一であるか否か確証がないが、それは別として、Cordier Catalogue には、Dānaśīla と Vībhūticandra が十三世紀初頭に Bengal の Jagaddhala 僧院から、チベットに入ったことが記されているから、問題の Jagaddhala は一二〇二年まで存続したと想定される。それ故 Mokṣākaragupta の活躍は一〇五〇年から一二〇二年の間であると想定して置く。

次にテキストについて記せば、Tarkabhāṣā の梵文テキストには二種存する。Embar Krishna によって校訂され、Gae-kwad's Oriental Series, Vol. XCIX (2) において出版されたテキスト、そして H. R. Rangaswami Iyengar によって一九五二年、Tarkabhāṣā and Vādashāna of Mokṣākaragupta and Jñāripada によって Mysore で出版されたテキスト(M)とである。両校訂者が依用した数種の写本は不完全である。M において見出される箇所では、G において欠如している部分がか

なりあり、特に最初の数ページには、写本が不完全なるため、誤謬が多く信頼できない。一方 M が基づいた Mysore Oriental Library 所蔵の写本には三葉が欠けているが、G と M とを比較すれば、全体的に M の方がはるかに良く、だいたいチベット訳とも一致する。この英訳は原則として M に従い、部分的には G 及びチベット訳の方が良い場合にはそれらにより、その都度明示されている。

最後に、内容を通読して疑問に思った点をあげておきたい。Appendix 1 において Pramāṇavārttika に説く四種の基本的な不認得因の名称を(1)viruddhasiddhi (2)viruddhakāryasiddhi (3) hetvasiddhi (4) dṛṣṭānmanor asiddhi となっているが、dṛṣṭānmanor (知覚のなき自体をもったもの)なる言葉は(4)だけではなく(3)の hetvasiddhi にもかけて用いられるべきではないだろうか。

以上によりこの書の豊かな内容を充分知ることができたが、ことに後期佛敎論理学に対する優れた入門書であると言いつる。英訳は明確にして、詳しい脚注には特に法称、Jñānāśrīmitra, Ratnakīrti などとの比較がなされ、単なる脚注というよりは研究である。多年 Jñānāśrīmitra, Ratnakīrti など後期佛敎論理学に専心せる訳者だけがなしている成果であり、この英訳は佛敎論理学研究に大なる貢献をなすであろう。